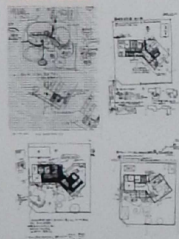


バナキュラーな家

Space is Flowing: 土間は鳥々を結ぶ川の流れるように

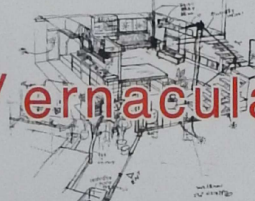


Sketch book

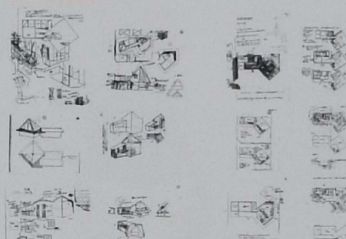


住まい方が自由に生活している。反面、様々な要素に縛られて、何か制限を感じる。この現状を、本当に進化と呼んではいけないだろうか。もしかしらば、進化しているのかもしれない。人間らしきものはどうに……

Vernacular



Sketch book



大きな土間を盛り、扉は壁ながらの扉である。土間と壁との境界は、当然、壁のような風景ができる。この風景に寄り、人と人の生活が生まれる。家の中に植物を置くのではなく、植物を植える。

少しでも遠くまで思いは解決できないことがあった。何でも数式で解くことができると思ったけど、3.4.5の輪廻を繰り返す事にした。もはや人間である。

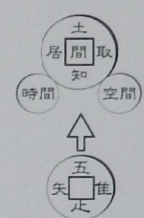


「分け」と「合わせ」

バナキュラーな家コンセプト

「分け」と「合わせ」の「間」のすまい建築は様々なエレメントの積み重ねから成り立っている。住宅という最小限の建築空間にバナキュラーな「外と内の相互貫入」「分けと合わせ」の手法を試みた。「土間」外と内を分ける結界の役目をしてくれる。かつてサーバントスペースであった土間がマスタースペースとして機能するのである。「間取」:アミーバー状に触手を伸ばし外空間と内空間の融合を図る。「間知」:鈍角に振られた配置は心地よい「居方」と距離感「間を知る」ペクトルを作り出している。「居間」:自然と人工が交差するところ。すま居方も家族が出会う交差点。外と内をつなぎ「昔」と「これから」を結ぶ中間帯である「今」=居間。「時間」:土間に設けられた植栽は太陽光と土がもつエネルギーを時の営みの中に成長をする。

「空間」:デザインはシンプルに! 空間は流れるように!



「分け」と「合わせ」の「間」のすまい

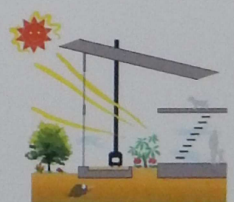
建築思考に「分け」と「合わせ」の思考を持ち込む事は元々初歩的なことでもある。中心に「間」を置き周囲に分けられた「土」「居」「知」を合わせる事で、新しい「空間」創造を「時間」の成長と共に目指すものである。「自然と人工」「デザインとテクノロジー」等々と「仕」分け「る」思考形態で近代建築はかなりの成果を上げてきた。時代の方向は分けてきたものを統合し「合わせ」る事でそれらが同化し始めてきた。



外観は、塔(山)と箱(平地)の組み合わせ。外壁は、無機質(ガルバリウム鋼板)と有機質(ラージ合板)の融合。土間は、結界の役目。自然と人工が交差するところ。すま居方も家族が出会う交差点。「外」と「内」をつなぎ、「昔」と「これから」を結ぶ「今」(居間)。太陽光による自然採光と薪ストーブによる人工採暖のコラボレーション



外と内の相互貫入



Section

※室内緑地は、大物のエスプレッソ(家賃)を意図的に導入する
※室内緑地は、大物のエスプレッソ(家賃)を意図的に導入する
※室内緑地は、大物のエスプレッソ(家賃)を意図的に導入する



敷地面積 200.15㎡
1階床面積 50.80㎡
2階床面積 50.35㎡
延床面積 101.15㎡